

日本・中国・韓国における 文書の残り方

九州大学 大学院人文科学研究院 教授
坂上康俊



研究の背景

意思を確実に伝えるため、また後日の証拠とするため、古来、文書が作成されてきました。日本でも韓国でも、漢字文化の伝来とともに、文書の文化をも中国から導入しており、過去に作成された文書は、歴史研究の最も重要な素材となっています。

しかし文書の残り方は、国によってかなり違います。日本では、8世紀の正倉院文書数万点は措くとしても、寺社などに残された平安時代の文書が4000点以上、鎌倉時代までで考えると、ほぼ同時期までの西欧全体の文書残存量に匹敵します。

ところが韓国では、高麗までの文書は60点程度と残りが悪く、両班の家系の確立とともに16世紀ころから爆発的に残存量が増えます。中国では、簡牘を除くと、敦煌・吐魯番文書、明清の檔案、徽州文書等の特定の文書群など、幾つかの性格の異なるグループが残っています。両国ともなかなか通史的な文書史が描けない所以です。

研究の成果

こうした現状を踏まえて本研究では、中国や韓国の文書の歴史を、断片的な記述や石碑などの新しい素材を用いて可能な限り精密に描くことと、何故両国では古い時代の文

書の残りが悪いのかという問題に取り組んでみました。前者については、本研究の分担者、及び4度の国際ワークショップへの招聘者の個別の論文として成果を報告しています。一方、後者については、特に韓国での考え方に興味深いものがありました。韓国で古い文書が残らなかった原因の一つには、もちろん戦争があり、朝鮮戦争で激戦が続いた地域が、その典型です。一方、慶尚道では、身分を隠すために商家の文書が大量に破棄されたといえます。つまり儒教的な身分意識が、文書の残り方を大きく左右したのです。

今後の展望

韓国での事情を参照すれば、日本での文書の残りの良さの背景にも、効力への期待ばかりではなく、文化的な背景、たとえば書かれたものへの執着の存在、あるいは文書群を持つこと自体の効力の存在を想定した方が説明しやすくなるかもしれません。日・中・韓の比較からヒントを得ながらの、今後の検討が待たれます。

関連する科研費

平成19-22年度 基盤研究(B)「前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究」

坂上康俊研究室
九州大学人文科学研究院

トップページ

業績一覧(工事中)

ご意見(工事中)

アクセス

データベース

連絡写真

前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究

前近代東アジア諸国の文書に関する研究文献目録

ここでは坂上が代表となって取得した科学研究費補助金(基盤研究B)による研究「前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究」の成果の一端として、中国・韓国・日本の前近代における文書の形態・様式・機能・伝来等に関して論じた論考を、国別・時代別に提示する。ただし、「文書」の定義自体が、研究対象とする地域・時代によって異なっているという現状があるので、ここではゆるやかに、書籍(編纂物)や日記などを除き、縁ないし木竹に記された文字史料で、それ自体が複製されたか、もしくはその写し・控え等をとり上げた研究文献を広く捉えることにした。いずれの目録も最終版の15版あり、今後、補記につめていく所存である。

- ◎中国・隋唐南北朝以前(稿)
- ◎中国・隋唐五代(稿)
- ◎中国(宋・元)(稿)
- ◎中国・明(稿)
- ◎中国・明清(稿)
- ◎韓国・前近代(稿)
- ◎日本・古代(稿)
- ◎日本・中世(稿)
- ◎日本・近世(稿)

▶ RETURN TO TOP

copyright©2011 Sakae Yasuhito Laboratory All rights reserved.

上記の科研費による研究成果の一端として、中国・韓国・日本の前近代における文書の形態・様式・機能・伝来等に関して論じた論考を、国別・時代別に取りまとめ、ホームページで公開している。

http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/his_jap/premodernpaleography/bunken-zenkin dai.html